授業科目名： 環境社会学	教員の免許状取得のための 選択必修科目	単位数： ２単位	担当教員名：保屋野（ほやの）　初子（はつこ） 担当形態　単独
実務内容 （実務家教員の場合）	環境ジャーナリストとして国内外での取材活動をもとに記事、著書、講演などを通して環境問題のなかでも水問題（ダム開発や水道問題など）の現場とその背景を伝える調査報道、および編集者としても多くの雑誌、書籍の製作に関わってきた。仕事の傍ら大学院修士課程・博士課程で研究を行い、修了後に大学で授業をもつようになり今日に至る。社会貢献活動では、小規模水道を支援する NPO 法人の立ち上げと運営に関わり、公益財団法人日本自然保護協会理事も務めた。星槎大学では、共生科学概説（2)、環境社会学、水環境論のほか沖縄県北部地域での「やんばる演習」、長野県小谷村での「里山体験ゼミ」を実施している。		
科　目	教科及び教科の指導法に関する科目 （中学校社会及び高等学校公民）		
各科目に含めることが必要な事項	教科に関する専門的事項「社会学、経済学」		

「学位授与の方針」との関係
Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅと深く関連している

授業のテーマ及び到達目標
生活の水、食べ物、ゴミ、子どもの遊びという身近なテーマを取り上げ、自分（たち）自身の生活環境が自然とのかかわりの上に成り立っていること、過去数十年でそれが大きく変化したこと、環境問題は社会経済のあり方や生活スタイルと深く結びついていることを、社会学的な見方や方法によって理解し、環境問題を自分（たち）の問題として捉え解決に向けた道筋を考えられる力を修得する。

授業の概要
（１）生活で使う水に関する歴史的な経過と環境問題について、上下水道以前の暮らしを参照することによって把握し、水と私たちとのかかわり方を「近い水、遠い水」という見方で理解する。
（２）私たちの食べ物がどこから来ているかを手がかりに、数十年前の食との質的・量的・文化的な違い、変化の背景、環境問題との関係などについて「遠い食、近い食」を用いて分析する。
（３）ゴミ問題とは何か、いつからなぜ発生してきたかなどを経済社会と私たちの生活様式の変化をたどりながら理解し、かつてのモノとのかかわりの文化にその解決のヒントを見出す。
（４）子どもと生き物とのかかわりを遊びにおいて、また世代を通じた遊び調査から捉え、子どもが自然の中で遊ぶことの意味や重要性を考える。
（５）（１）～（４）のテーマ学修を生かし、自身の生活環境の中からテーマを具体的に設定、調べ、分析し、まとめて発表することができるようにする。
（６）テーマをさらに深く追求するために、ローカルなテーマのフィールド調査を行うことの重要性を理解する。

以上について、アクティブラーニングの手法も用いて実施している。

授業計画　　（　）内はテキストの対応する章・節

第１回：モノ・コト・ココロから生活環境を見る（はじめに）
第２回：水道以前の暮らしと水、その後の変化（第１章 1.1）
第３回：「水社会」と呼ばれた日本人の水とのかかわり（第１章 1.2）
第４回：水とココロ（精神文化）ではかる自然と人との距離感（第１章 1.3-1.4）
第５回：「遠い食べ物」「近い食べ物」で読み解く日本の食の問題（第４章 1.1-1.2）
第６回：「遠い食」の背景にあるアメリカ化、食の全体性とは（第４章 4.3-4.4）
第７回：ゴミとは何か、ゴミ増加の歴史的背景（第５章 5.1-5.2）
第８回：ゴミとエネルギー問題の関係、モノとのつき合い方（第５章 5.3-5.4）
第９回：子どもの遊びと生物多様性との深いかかわり（第６章 6.1-6.2）
第１０回：子どもの自然遊びのおもしろさ、これから（第６章 6.3-6.4）
第１１回：身近な生活環境の中の課題を調査しまとめる（第１章、4 章、5 章、6 章をふまえスクーリング受講およびレポート提出）
第１２回：アメリカ、アフリカ、日本で異なる湖とのつき合い方（第７章 7.1-7.2）
第１３回：３つの社会の比較、途上国から学ぶこと（第７章 7.3-7.5）
第１４回：まとめ(1) 環境問題の見方、ローカルとグローバルのつなぎ方（第８章 8.1-8.2）
第１５回：まとめ(2) フィールド調査のすすめ（第８章 8.3）
定期試験

スクーリングでの学修内容
（主に、授業計画の第２回～第１０回の内容を含む）
「環境」とは、「環境問題」とは何か、人間と環境とのかかわりについての講義の後、環境問題が起きる仕組みや社会との関係を水俣病などの事例に基づいてディスカッションを行い、他者の問題意識や意見の交換を通して自身の問題意識を広げ深める。具体的には、教員からの話題提供（テキスト内容や事例）に対して、各自が自分の経験や考えを言葉にする時間を持った後に、グループディスカッションあるいは討議を行って発表し、さまざまな考えを共有する。複数の話題についてこれを行い、最後に各自が関心をもったテーマについて「今日の私の問題意識と考え」を発表する。

教科書
嘉田由紀子（2002）『環境社会学－環境社会学入門９』岩波書店 ISBN 4-00-006809-1
上記教科書の入手困難な場合は、必要な内容を事務局より配布

補助動画教材
野生生物と人類を考える講座～グローカルで超分野視点から学ぶ～　20～34
https://www.youtube.com/playlist?list=PLwrsvYhJb8rKKLwM-kh2_e8T9Ozs-VtDt

参考文献
（１）鳥越皓之・帯谷博明編（2009）『よくわかる環境社会学』ミネルヴァ書房
（２）鳥越皓之（2004）『環境社会学 生活者の立場から考える』東京大学出版会

学生に対する評価
レポート評価（２５％）、スクーリング評価（２５％）、科目修得試験（５０％）の割合で総合して評価する。